ph.1

小田又の記 vol.02 2015.10発行

島根県益田市美都町にある小田又（こだまた）という名の集落。この地を軸に暮らす人たちのドキュメント。

小田又集落の入り口に、あと一度台風が来たら崩れてしまいそうな納屋がある。ここ数年、納屋周辺の草刈りに年に二度、決まった時期にやってくる倉敷ナンバーのセダン。寺戸武男さん（75歳）は小田又で生まれ、現在は岡山県水島の工業地帯に暮らす。2014年の夏草刈り。小田又の昔の様子を初めて伺うと、近所に暮らす御姉妹のアルバムから1枚の棚田の写真を貸していただいた。小田又の昔の姿を目にしたのは、この時が初めてであった。セピア色した写真の小田又は見慣れた輪郭を残し、今より細かに刻まれた田んぼのラインは国土地理院の地図の等高線のようあった。夏草刈りの雨宿りに、納屋の中でお話を伺った。

製作・取材・編集 佐原宏臣
佐原晃子

〒698-0203 島根県益田市美都町都茂 1906-3
TEL 090-6545-3830　FAX 0856-52-2829
メール saharach2006@gmail.com

［2015.08.21 録音］

寺戸：だいぶいっぱい木がおいてあったんじゃ。それを薪にして下に置いてやって、草をおいたら良く燃えたんじゃ。この小屋も初めは藁じゃったんだが、トタンに替えたんじゃ。そんな話すことはないっすよ（笑）。俺らぁもね、18ぐらいで出たんで、昔のことなんか（そんな覚えていない）。ちょっとずつ直せば（この小屋も）使えたんだけど。これなんか、ホントの俺なんかが生まれた頃のやつだもんね。この写真（ph.2）が本当の俺ら生まれた頃のやつだもんね。ここに梨の木があって、あのサザンカがこっちにあったのを移したんだな。今あそこにあるサザンカがここにあったんだ。

―― ここに人がいるんですよ。

寺戸：眼鏡が無いと見えんね。お袋かもしれんね。ここにもおりゃせんかね。オヤジとお袋かもしれんね。これが柿の木で全然変わってないもんね。この辺も田んぼだったがね（水路の上を指さして）。日が当たらんとこでね、こっから道の跡があってずーっと上にあがる道でそこの上に畑があって、うちのおばあさんがこんにゃく作りよった。

―― お母さんはずっとここで…

寺戸：ここで死んでるわね。平成8年。

―― 最近まで弟さんとお母さんが一緒に小田又で暮らしておられた。

寺戸：そうそう。アレが全部面倒見てくれたからね。まあ、あれがいてくれたから俺は助かったんだけれども。

―― 写真（ph.2）に映っている弟さん、随分歳が離れていますよね。

寺戸：16違う6人兄弟の末っ子。あの頃はそりゃぁ親父なんかも多少出稼ぎにでたもんね。俺らの頃は現金収入っていうほどそんなに金はいらんかったもんね。戦後すぐ、（何にも）なかった頃だもんね。その辺がみんな苦労したんだわね。だから、この辺長男あたりで残る人はみんな役場か森林組合か農協か郵便局あたりに使ってもらって、残るんだからね。あの頃はみんな5、6人は家に子どもがおるからね。結局食っていけんからみんな出るわね。都会に出るから今みたいに人がいなくなっちゃったんだね。

ph.2

—— 出たら仕送りとかするんですか？

寺戸：せにゃいかんけど、あまりせんわね（笑）。だから親孝行していないから今頃、申し訳ないから草でも刈って、「勘弁してねぇ」って言いながら草刈ってる（笑）。やっぱり嫌で出てきたけど、生まれたところは歳をとるとものすごく懐かしいね。だから、住んでると何とも思わんけどね、「こんな山の中で、まあ！」と思うけど。やっぱり出て俺らの歳になるとね、寝床の中に入っていると、「あそこに石があったな、あったな」って思い出すわね。やっぱ懐かしいんだね。それでなきゃ帰って来にゃーせんです。うちの女房なんかにいうと「やだ！」なんて言われちゃう。「なんであんなとこ行かにゃぁいかんの」って言われちゃう。（笑）。この辺、子どもはみんな子どもの時から何かはやりよった。みんな、両親が仕事するから、俺なんかはご飯炊いたりね、あれなんかしよった。釜で薪でね。現金収入がないから、昔は田んぼやるのはみな牛でやるんじゃけね、現金収入ないから子ども産まして子ども売るんだぁね。それをどっか持ってって肉牛にするんだろね。あの頃結構牛の値段がよくてね、一匹俺も詳しいこと知らんがね、1年くらい育てて出すんだがね、売ってあの頃だからいい値段じゃなかったかね。

—— この納屋は？

寺戸：ここから向こうが牛の納屋。半分はね農作業したり、この中で稲をこいだり、作業部屋みたいなもんじゃね。

—— この弟さんを撮られた写真。昭和の36年頃になるんですよね。小田又を出て2年くらいの帰郷の際に…

寺戸：そのくらいでしょうね。

—— この頃は前に見せてもらった写真(ph.1)のように棚田が綺麗に維持できていた時代ですよね。

寺戸：あの写真はね、護岸整備をやって多少周りが良くなってるからね。俺が出て10年もせんうちに工事をやったんじゃないかな。

—— 護岸整備は弟さんの写真より後？

寺戸：後です。この頃はこの川の筋なんて出来てなかったですね。田んぼの水は今、上に溝があるでしょ。あれから取りよったんじゃ。昔からあるんじゃ。俺ら子どもの時からある。

—— 今現役で使ってはいますけど、昭和の遺跡ですね。

寺戸：そりゃ、昔の人が考えて作ったんじゃろうね。わりと昔はこのへんは水害が多いところでね。子どもの時は台風とか大雨とか、ここなんかとかは崖崩れ、山崩れみたいなことになったりね。58年は（都茂川の）面（つら）が（家の敷地と）同じくらいになってるからね。58災害(※1)の時に撮った写真見ると、お袋が座ってて、川の面が同じくらいになってたからね。護岸工事の後、砂防があるから水が上からあがってきた。砂防ダムの上からこっちに（流れて）面になるまで上がっておったって。家は大丈夫。俺は家がやられてるかなと思って帰ってきたんですけど、あん時は倉敷、今のとこにいたんですからね。58年だから電話が出んもんだから、2日か3日して帰ってきたんですよ。道路に入れんから。今の191号線、戸河内から入ってきたんだけど道川のとこでこんなに道路に穴が開いて通れんじゃぁね。道路が流れてしょうがねえから引っ繰り返して六日市から入って、益田（市街地）まで入ったけど、益田は全滅だもんね。こっちの筋は全部道路が流れてみんなリュックサック背負って行ったけども「道無いよ」って言われて。それで入れんから、引きかえして、匹見はどがーかなぁと思って、あそこ行ったら匹見は通れたんじゃ。匹見からね山越えで美都に出る道があるんじゃが歩いてね。車は通れんよ。道路がダメだから歩いて、来たんだけど。実家はよかって、そしたら、（隣集落の）妹のとこはダメだって聞いて。家から見た感じ、わりと水が出たっていう感じじゃなかったけどね。小田又はそんなじゃなかったけど、（町内で）あっちもこっちも崩れるって言う話はあったね。

去年夏草刈りの時に約束した写真を、今年の春草刈りに忘れずに持ってきていただいた。まだ小さな歳の離れた弟さんが、兄である武男さんのカメラを見つめている。

—— よう草刈りやりますね。75才っていうと、戦前ってことですよね。

寺戸：そりゃぁ、昭和15年生まれだから。俺ら生まれて1才になるかならんかの時ぐらいに戦争が始まったんだからね、16年だから。戦争が終わったときは5つか、昭和20年だからね。今年70年だからちょうど5つの時。小学校は昭和22年だからね。終わってちょっと一服してから小学校入ってるから。そりゃ教科書なんかでも茶色のちょっとしたら破れるような紙だものね。でも、小学校5、6年くらいになるとグーッと変わってたからね。もう良くなってからはね。着るもんもあったしね。ただ、あの頃はどっこもそうだろうけど、栄養不足だったよね。みんな鼻が出てるし、だから小学校2年の時の写真なんかでも左右違う長靴履いたり、下駄履いたり草履履いたり。

—— 戦争が始まった時の事って、何となく…

寺戸：覚えてない、覚えてない全然。この辺は別に爆撃も何もあるわけじゃぁないからね。ただ、空にアレがB29だって、高いところにビーンと、アレがB29だってことは多少覚えておるがね。まあこの辺は爆撃も何もあらへんからね。

—— お父さんとお母さんは家におられた？

寺戸：オヤジはね子どもの時に中耳炎やって、あのぉ、合格せんかったんじゃぁね。それで終戦近くなって広島の方へ行くってことになったけど、終戦になって行かんかって、オヤジはね。うちの親父が広島へねぇ、終戦近くで、やっぱり人がいないから、徴兵のあれを受けて広島のどっかに行くってことになってね、あの頃はきちっと門を作って紅白のあれを作って、ここへ、それは確か覚えてるな。子どもの時に嬉しかったのを覚えてる。俺は分からんからね。兵隊行くぞって。俺は27か8の時の子だからね。

—— 30才ちょっと過ぎくらいの出兵ってことですね。

寺戸：結局うちなんか、さっき言ったけど耳が中耳炎でダメだから、甲種合格にならんで、だから、兵隊とられんで良かったんじゃ。ただ終戦近くなって、おらんから、広島連隊に行くっちゅうて、それやったのを覚えてるじゃあね。

—— 赤白の門をお父さんのためだけに作って…

寺戸：そうそう、そこに作ったのは記憶ある。それは俺もよう分からんけどね。そこに石があるでしょ。あの辺に確かあった、まあ、ちょっとしたことだと思うんだけど、ただ子どもの時だから嬉しくてね。分からんから。その記憶はあるね。戦争…で、早く行ってら、原爆あって死んでらぁね。広島だもんね。だから、原爆が落ちて中止になったんだろうね。あれが8月6日でしょう。終戦が8月15日でしょう。だからそれで、オジャンになって行かんかったんじゃないんかね。うちのおじさんなんかは満州行って招集で、結局負けちゃってシベリア行って、シベリアで抑留されて帰ってきたもんね。（親父は）昭和54年に亡くなったからね。ちょうど近くの葬式に行っているところで倒れて、それっきりで。脳溢血かなんかでね。66か何かで。俺は四国に転勤で子どもを連れて、まだ子どもは小さいからね。で、帰ってきて、でそこで半日くらいは意識はなかったけどね。死に目には会えて。俺が帰ってきてしばらくしてから亡くなったけどね。4月の3日か2日だったか、結構、まだ寒い頃だから。脳溢血でコロッと逝っちゃって。血圧ものすごく高かったんじゃ。普段。

—— 普段仕事は農業だけですか？

寺戸：そうそう、元気だったですよ。「おりゃー死にゃーせんって」言いよったけれど、血圧高かったからね。それで…

—— この辺の小さい田んぼと畑を作って子どもを6人育て上げた。

寺戸：貧乏でね。ずーっと貧乏だった。今でも貧乏だけど。

—— 18才で東京へ出る頃って、出たくてしょうがなかったですか？

寺戸：そうだね。嫌だものね。日曜日くらい朝早うから、暗いうちから起きて夜は遅うまで仕事するんだものね。それであんた、お金ないしね。百姓やっても「こりゃー将来やっちゃおれんわね」って皆出るわね。ほとんど皆出たわね。昭和34年に出たからね。もう、だいたい。戦争終わってから日本の景気もどんどんよくなる。やっぱり食えないものね。就職口がないもの。とにかく朝から晩まで泥んこになって飯を食わにゃ何ともならんもんね。39年がオリンピックでしょう。そのときに向こうにいたけど、俺が出てから5年目か。いきなり東京。

—— ツテがあったんですか？

寺戸：島根県の副知事が社長でやっておられたガス会社に学校ごとみんな行ったんだ。東京行きゃ、メーター調べて楽できるって。そりゃ就職口がないんだもん。長男は残るけど次男三男はありゃせんものね。

—— 長男じゃないですか。

寺戸：俺は長男だけどすぐ出て…（笑）

—— なんで出ちゃったんですか。

寺戸：やだもん。こんなとこ。機械化はできんしね。こんな細かいからね。お金が無けりゃ生活できなくなったんだ。時代がね。俺ら子どもの時、こんな話よそへ行けばあんまり言わんでね、恥ずかしいから。醤油作る、味噌を作る、みな作りよったんだもん。

—— 別に恥ずかしくないじゃないですか（笑）。奥さんとは東京で…？

寺戸：そうそう、あっちでおるときに一緒になってね。今のところ一緒におるけど、喧嘩しながら（笑）。

—— 初めての東京はどこでしたか？

寺戸：一番最初は八王子に行ったな。犬目っていうとこ。ほいで、当時はまだ家がね草葺きの家で、八王子の駅からバスで。あそこにプロパンガス屋の充填所

（※1）**昭和58年7月豪雨災害**
7月20日から降り続いた雨は23日未明から最大時間雨量64ミリの猛烈な集中豪雨となり、美都町全域に大災害を引き起こした。道路網を寸断され電気も水も、通信手段のない陸の孤島となった美都町に対し、災害救助法による救援を島根県に要請…
『美都町の動きと山料誌』より

【表紙の虫】**ツマグロヨコバイ ♂**（褄黒横這）
オスの成虫は羽の端（ツマ）が黒く、横に這うのでこの名がついたということであったが、最近の資料では着物の裾の合わせ目の褄（ツマ）のことであったようだ。稲作では「萎縮病」のウイルスを感染させる害虫と記述されることが多いため、農薬散布が現在でも行われている。農薬に対する抵抗性が発達しやすい虫であることから1950年代以降の農薬散布により天敵が減ったことで逆に大発生したと考えられる。刺されるとチカッとする。5mm。
『田んぼのめぐみ 150』（農と自然の研究所他編）参照

島根県益田市美都町都茂、水稲生育試験のためのバケツ苗より 2015.09.29 採取

2015.02.08

があったんだね。50kgのタンクを10kgに移し替えるんじゃ。それを今度東京の奥の方ね、横浜からみんな配るわけだ。それを半年やって、あの頃八王子には自動車の教習所がなくて、どこ行くかって言うたら立川へバスに乗って行って。ほいで、俺なんか田舎で益田でバスなんか年に1回か2回しか乗ってないのに免許取りいって何が何だかさっぱり分からんで（笑）。苦労したわね、取るのに。へたくそで鈍くて怒られちゃってさ、基本料金は会社が出してくれるけど、仮免なんか1回滑っちゃってさ、金がないのに、苦労した。今でも忘れんけど。あの頃は免許も何でも府中の自動車センター行ってね、掲示板にデーっと、34年の10月か11月に取ったんだもんね。それで、取ってすぐね、「お前車乗ってみ」ってトヨエースで道出て、犬目出てちょっといってカーブで曲がらんで電柱へドーン（笑）。新車の車がさ…

―― 会社の車？

寺戸：会社の車。だから、今写真とってあるけどさ。前ちょこっと凹んでらーね。だからね、下手くそだったんでよく怒られた。それで、八王子の裏っ側の拝島街道だったかな、夜誰もおらへんもんね。ポンコツ貸してもらって独り夜練習するの。何とか乗れるようになってね。嬉しかったね。それから免許取って動けるようになったから田無に行ったんじゃ。西武新宿線だよね。

―― けっこう郊外、っていうよりは昔のほんとの田舎ですよね。

寺戸：東京でも横浜でも大きいとこは都市ガスが行ってるから、プロパンガスは都市ガスが行かんとこへ行くんだからね。だから郊外だわね。

―― どんどん人が増えてるところへいっているわけだ。

寺戸：今なんか皆大都会になってるわ。それから横浜の綱島行ったんじゃ。そこで辞めて、就職して今の会社入ったんじゃ。車関係。トヨタの子会社入ってね。

―― 車の仕事に移るきっかけは何だったんですか？

寺戸：それは新聞広告があったもんで入ったんじゃ（笑）。ただそれだけ。運良く入れてもらってね。

―― 上り調子の業界に入ったわけですね。

寺戸：一番いいときだ。俺なんかは。どんどんどんどん売れて、往生こきよったわね。めちゃくちゃ忙しかった。だから、よく言うんだけど、今の人はいつリストラになるかわからへんからね。俺なんかの時は仕事はどこ行ってもあるからね。仕事はきつかったけどね。給料も下がることはなかったものね。

―― お子さんいらっしゃるんですか？

寺戸：二人。娘、息子がいて。長男が41かな。

―― 私たちとおんなじ世代です。

寺戸：毎日遅くまでやってるみたいですよ。息子は関東で暮らしていて、結婚して子どもがいて…。転勤で連れまわして、ほいで、倉敷で小学校入ったからちょうど良かったんで、だから動かなかったんじゃ。あそこに家作って。完全に倉敷、水島の人間になったからね。

―― お子さん小田又に連れてきたことあるんですか？

寺戸：うん、ここでずーっと遊んでた。しょっちゅう帰りよった。

寺戸：息子なんか、「行ってみたいな」って。メール打って「おい、草刈り来てくれよな」ってメール打ったけど。

―― 今度来てくださいよ。一緒に草刈りに（笑）。